

第一話 遠いえにしのかの人へ（酒は涙か溜息か）

たわいなく酔いしれてしまふくせに、どういふものか酒好きで、よく何軒もはしごをする。だが、やはり一番たのしいひとときは、心やすらぐ馴染みの店で、グラス片手に流行りの歌を、唄うともなく口ずさむときである。それができるところを、地元・八王子に一軒、そしてなんと、遠く京都の祇園にもひとつもっているのが、自慢である。

地元も京都も、どちらもいつしか心許してとうに十年を越えた店である。八王子には月に一、二度、祇園には年に二、三度。行けばきまって一曲唄うことになる。まわりがひとしきり済んで一瞬静まると、待ちかねたように、そつとマイクが差し出される。

「ハイ、酒は涙か溜息か。出番です」

えつ、いいのかな。出番ですよ。そうかな。そうです。小声でやりとりしながら、もちろんしかし、断わることなどありはしない。このしばしの往き来が、私にとってえも言われぬひとときなのだ。そして、誰に聴かせるともなく、思い入れて、忘我のうちにときめきつたう。

酒は涙か 溜息か

心のうさの 捨てどころ

しかし、私がつっぱら唄うのは、この一番の歌詩だけである。伴奏が繰り返されて二番になっても三番になっても、私はひたすら、繰り返す。

酒は涙か 溜息か

心のうさの 捨てどころ

はるかに遠く、十代の中頃に、習い覚えたギターを奏でながら、「影を慕いて」や「酒は涙か溜息か」など、今でいう「演歌」を唄って、「恋心」に憧れた。やがて熱愛……、はかない別れ。そのとき、かりそめに口ずさんだ演歌エレジーが、なんと虚しくひびいたことが。演歌なるものの空々しさ……。そこから逃れ出るように、教則本を古賀政男のものから力ルカッシへと代え、やがて「禁じられた遊び」や「アルハンブラの思い出」の虜になって、大学生にもなると、ギターに限らず、ピアノ・ヴァイオリンなどいろいろなクラシック音楽会にしばしば出向くようになった。

もちろん、流行りの歌を唄わないわけではなかった。折にふれて、「雪のふるまちを」、「有

楽町で逢いましよう」など、よく唄ったものだ。が、「演歌 などという言葉がいつの間にもやら市民権を得るようになっていたとは露知らぬこと、以前のように心を寄せて唄うなどということは、すっかりなくなっていた。

それが、二十代も終わりの頃、久しぶりに会った郷里の友人とどこぞのスタンドバーで思ひ出話にふけていたときだった。とうにえにしなき人とは思ってはいたが、清きかの人嫁してはや一児の母となつてゐることを聞かされた。我知らず、酔つてうるんだ目が熱くなる。ふと気がつく、いつのまにか口ずさんでいた。

\* 酒は涙か 溜息か

心のうさの 捨てどころ

\* とおいえにしの かの人に

夜毎の夢の 切なさよ

何としたこと。唄いながら、ふたすじ三すじ、涙がこぼれた。

面白きかな。言われるように、演歌はやはり心のふるさとなのか。爾来、加齢とともに再び「演歌 を好むようになり、とくにこの唄「酒は涙か溜息か」を愛唱するようになった。

だがしかし、いつの頃からか、この歌はただに遠きかの人だけを偲ばせるのではなく、こ

ころ残したまま遠く去りゆきて還り来るはずもない人々を思い起こさせる歌ともなっていた。

とおいえにしの かの人に

夜毎の夢の 切なさよ

声に出して唄うと、情けなくも、たちまち臉がうるんでしまふ。私がここから先を唄うのは、ひとり静かに籠って、はるか彼方に思いを馳せるとき。そのとき、遠きかの人や、今はなき友、なき師……、そして泉下の父・母が、あるときはひとりとどまり、またあるときは走馬燈のごとく、現われては消え、消えては現われる。

忘れた筈の かの人に

のこるところを なんとしよう

高橋掬太郎作詞・古賀政男作曲の「酒は涙か溜息か」、私にとってこの歌は、「遠いえにしのかの人」びとへ捧げる相聞・追悼の歌である。